

特集
伝承
～志を次世代に～

Special Features
Tradition
Passing aspirations on to the next generation

伝承技能・技術
Traditional skills and techniques

繰り返されることで伝承される心と技

石垣仁久

ISHIGAKI Yoshihisa

神宮司庁広報室/係長



1—はじめに

平成18年7月30日、三重県伊勢市の伊勢神宮に、秋篠宮殿下が眞子内親王殿下を伴われて御参拝になり、当日行われていた御木曳行事を御視察になった。五十鈴川を遡って内宮域内に運び込まれた御木を曳くための太い白綱が参道に長く延ばされると、秋篠宮殿下と眞子内親王殿下には「神宮式年遷宮」と染め抜かれた法被姿でお出ましになり、大勢の関係者に加わって御木をお曳きになられた。このことは式年遷宮という一大事業の成功に心を寄せる多くの人々に深い感動を与えた事は疑いがない。

御木曳というのは、式年遷宮という20年に一度、社殿の建て替えに必要とされる檜の用材を人力で搬送することで、その担い手は、かつては伊勢神宮の周辺にあった神領地の住民が奉仕することになっていた。その人々を旧神領民と呼ぶが、現在では市町村合併などによる変遷があり、旧神領地以外の市民も含めて6万人以上が参加している。そのなかには一日神領民として全国から3万人を超える参加者がある。

伊勢神宮には皇大神宮(内宮)と豊受大神宮(外宮)の

二カ所の大神宮があり、その両者で御木曳は行われる。五十鈴川に面して敷地を有する内宮へは「川曳」と称し、用材を橇に積載して五十鈴川を人力で遡る運搬法が採られる。一方伊勢の市街地に接している外宮へは「陸曳」と称し、御木曳車または奉曳車と呼ばれる運搬用の台車で運搬されている。川曳、陸曳ともに用材の運搬手段を示す用語で、これを総称して御木曳行事と呼ぶのである。

かつて用材は木曾で伐採し、木曾川の流れを利用して桑名まで運び、そこから海路で伊勢まで輸送され、できるだけ宮域の近くまで河川を遡る手法が採られていた。今日では用材の輸送はトラックでなされているが、御木曳は行事として継承され20年ごとに繰り返されている。それは、伊勢神宮を古代の建築様式で建て替えるために、人力で木材を運搬するという、極めて原初的な営みの繰り返しなのである。

2—伊勢神宮とは

伊勢神宮は日本人にとって特別な存在である。それは神宮が皇室の御祖神を祀っており、かつ国民の総氏神



■写真1—新旧の社殿が並び建つ皇大神宮



■写真2—新築成った皇大神宮



■写真3—裏木曾御用材伐採式

存在であるという二面性を有しているからに他ならない。

伊勢神宮の信仰は全国に亙り広まっている。これは皇室の御祖神であるからこそ国民の等しく崇敬するところとなり、全国展開し得たのであるが、その遠因には伊勢の御師と呼ばれた人々の地道な活動があった。平安末期から鎌倉初期に神宮の経済的困窮が原因で下級神職が御師となり、諸国の有力者との師檀関係を結んだ。やがて毎年、全国津々浦々の民家を巡って神札を配るようになる。江戸期には全戸数に対する神札頒布率は90%以上に達していたといわれる。これはいかなる社寺にも見られない驚くべき現象である。

我が国には神社が8万社以上あり、それらは「神宮」と「神社」とに分類される。「神宮」とは伊勢神宮のみで、他はすべて「神社」に分類される。〇〇神宮と名のついても、分類上は「神社」となる。

その理由で最も明解なのが「誰がその神を祀っているのか」であろう。一般に神社は氏子と呼ばれる人々が祀っているのに対して、伊勢の神宮だけは天皇が祀っておられる。つまり神宮とは、天皇が国家と国民の平安を直接お祈りになる唯一の存在なのである。その御神体として歴代天皇が継承される三種の神器のひとつである八咫御鏡が神宮に祀られている。

従って朝廷の伊勢神宮のお取り扱いが格別であった。近代法の整備と共に、神宮が国家機構の中に組み込まれて行ったのもこのような事情があったからに他ならない。第二次世界大戦後は国家より分離され宗教法人となり、法律上は他の法人と変わるところはなくなったが、皇室の御尊崇をはじめとして神宮の本質には大きな変化はなかった。

3—神を遷す

伊勢神宮とは神社の集合体である。その中心は皇祖である天照大神を祀る皇大神宮(内宮)であり、その食

事を司る御饌都神、また衣食住のあらゆる産業の神を祀る豊受大神宮(外宮)がそれに次ぐ。この両大神宮にはそれぞれ別宮、摂社、末社、所管社が所属しており、その数を合計すると125社となる。

神宮では年間1,500回以上の祭典が行われ、その中で最も重儀とされるのが「神嘗祭」である。神嘗祭は、その年の新穀を天照大神に捧げて収穫を感謝する祭典であり、それを行うに際しては祭器類が新品に交換される習わしがある。そのため、檜の素木製の神宮の祭器類には装飾が一切ない。豪華な祭器類よりも、その祭りのために用意された新しい祭器の方が神聖とされるからである。更にそれを徹底させるのが、社殿をはじめ神を祀る施設のすべてを一新する「式年遷宮」の制度である。式年とは定められた年限のことで、神宮では20年である。

遷宮とは神を祀る宮を遷すことである。すなわち、現在の社殿とは異なる社殿を隣接する敷地に新たに建設し、そこに御神体を遷すことが遷宮なのである。形のある物体を動かす場合は「移す」と書くが、魂など形のないものを動かす場合には「遷す」の字を充てる。

神を遷すということは「場を改める」という程度では取まらないほど重要な意味を有している。遷宮とは単なる「神の引越し」ではなく、再建・再生・更新・蘇生などの漢語では到底表現し切れない日本人の精神が秘められているように思う。敢えてことばにすれば「永遠に繰り返される連続からもたらされる安定」となろうか。これは有史以来一貫して稲作を繰り返してきた民族でなければ到達し得なかった哲学なのかもしれない。

4—式年遷宮のはじまり

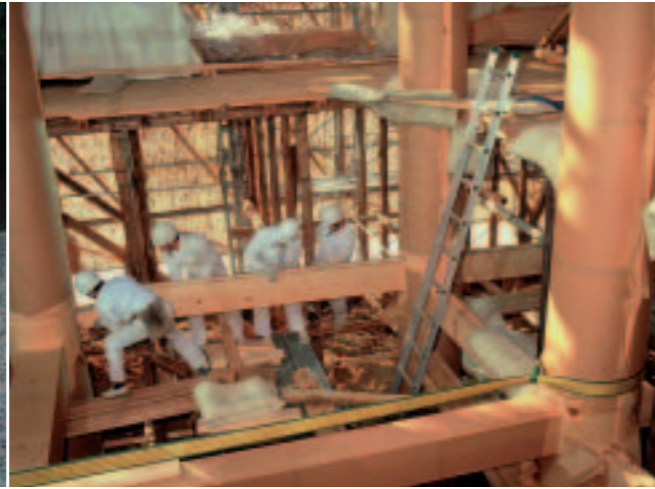
伊勢神宮には2,000年以上の歴史がある。『日本書紀』等によれば、天照大神が孫にあたる瓊瓊杵尊に八咫御鏡を授けられたことにはじまる。尊はそれを持ってこの



■写真4—新宮の柱を木槓で打ち固めて安泰を祈る立柱祭



■写真5—小工が造営を開始する木造始祭



■写真6—神殿は人力で組み立てられる

国に降臨され、その御子孫の天皇は、これを天照大神の神体として御殿を同じくし御床を共にして祀られていた。第10代崇神天皇の時代に八咫御鏡は更に相応しい鎮座地を求めて宮殿を出て、第11代垂仁天皇の時代に伊勢の地が選ばれて現在地に皇大神宮が鎮座した。

その後、7世紀に天武天皇は、律令の制定など国家の整備に努められた。それと平行して宮中の神まつりも種々整えられて行く中で、式年遷宮も定められたものと思われる。第1回の式年遷宮は持統天皇4年(690年)に行われた。遷宮の準備には数年を要することから、天武天皇の御在位中には既に御発意があり、持統天皇がそれを継承されたと考えるのが自然であろう。

以来、式年遷宮の制度は厳格に守られて来たが、惜しむらくは戦国期に130年の中断があったことと、第二次世界大戦の敗北によって昭和24年度の式年遷宮が4年遅滞したことがあった。それ以外は、1,300年の間、ほぼ20年周期で遷宮が繰り返されて来たのである。

これだけ長期的な継続事業は世界でも殆ど例がない。その継続の理由は、歴代天皇が神宮の式年遷宮を「皇家第一の重事」と重んじられたことに尽きる。また、式年遷宮は決して過去の歴史ではなく、その営みは平成25年の第62回式年遷宮に向けて今なお継続中であることが更に重要なのである。

式年遷宮を繰り返す限り、伊勢神宮は常にその生命を更新させている。時間は経過して行くが、新たな社殿に神を遷すことによって若返りという時間軸の逆行があり、そのことで「古くて新しい」という相容れない逆説の併存も可能にするのである。

5—遷宮で新しくされるもの

式年遷宮で新たに建造されるのは皇大神宮と豊受大

神宮の両大神宮及び御門・木橋(宇治橋)や御垣等の付属建築物、14の別宮、特定の所管社等が対象となり、その他の神社は対象外である。これらは10世紀に編纂された法令である『延喜式』に見えている。

「凡そ大神宮は二十年に一度、正殿、宝殿及び外幣殿を造り替えよ。(度会宮及び別宮、余社の神殿を造り替える年限は此に准じよ) 皆新材を採りて構え造れ。自外の諸院は新旧を通用せよ。(宮地は二処を定め置き、限りに至れば更に遷せ)」

式年遷宮のエッセンスとも言えるこの一文は、1,000年を経た今日でも充分通用する。ここに記された正殿とは一般にいう本殿で、神体はそこに奉安されている。宝殿、外幣殿は正殿付属の殿舎で、正殿に異常ある場合は仮正殿に充てられる可能性があるために造替の対象とされたのであろう。また度会宮とは豊受大神宮の古称である。

正殿に収められる御装束神宝もすべて遷宮ごとに新調される。その数は現在714種1,576点ある。御装束とは、神の服飾と殿内を装飾する布帛類である。神宝は調度品、威儀物、武具などである。これらの御装束神宝は、人間国宝など当代一流の技術者によって作製され、新殿に20年間、更に宝殿に20年間と合計40年間収蔵される。つまり、一端奉獻されると40年間は決して外に出されないのである。かつては40年を経た神宝は、神がお使いになった品であるので、人目に触れることを嫌って燃やされ、または地中に埋められていた。このような厳格な制度が、御装束神宝奉獻の伝統を守ってきたのだろう。

明治時代、内宮の域内から鎌倉期のものと判断された太刀が出土した。形状から皇大神宮の神宝の中でも特に重んじられる玉纏御太刀であることは一目瞭然であった。それが現在調製されている玉纏御太刀とはほぼ同型であったことが人々を驚かせた。

式年遷宮のたびに御装束神宝が調製されてきたことは、結果的に伝統技術の継承に重要な役割を担った。実際に今日では式年遷宮ごとの調製がなければ途絶えてしまう技術があり、過去に途絶えた技術が神宝調製をきっかけに復元されることもあった。

殿舎の新築も御装束神宝の新調も、最高の神に捧げる最高のものでなければならない。20年に一度の式年遷宮では、神殿や神宝はまったく新しくなるのだが、スタイルは変わらない。つまり本質は変えずに伝承されるのである。

6—式年遷宮を行う理由

「皆新材を採りて」というのは新築せよという意味で、「新旧を通用せよ」とは修繕を意味している。重要な殿舎だけ新築するには深い理由がある。

唯一神明造と呼ばれる建築様式は、弥生時代の穀倉に起源がある。特徴として高床式・掘立柱・独立した左右の棟持柱・萱葺き屋根・檜の素木材などが挙げられる。これらの構造を総合的に考察すると、重厚な萱葺きの屋根は湿度の高低によって自ずから重さを変化させ、壁板にかかる重量を調節していると考えられる。釘を用いない接合方法がそれを可能にしている。建造物が一個の生命のように、湿度や温度に応じて微妙に伸縮するのである。これは梅雨期を避けられない国土において、穀物を湿気や害虫から守るためのすぐれた構造であった。

一方、塗装を施さない素木造と萱葺き屋根は、耐久性の理由から定期的な建て替えが予定された建築物であると言える。そのような穀倉に起源を持つことが式年遷宮という制度を生んだ最も近い理由であろう。

しかし、千数百年の歴史の中で「耐久性の高い建築に進化しなかったのか」との疑問が生じるだろう。その答えは「式年遷宮の制度があったのでその必要がなかった」ということになる。つまり「スタイルを変えないための式年遷宮」があったので、自ずから「スタイルを変える必要がなかった」。「そのスタイルが故に式年遷宮を行う」と言えるのだ。まるで禅問答のようだが、重大な真実がここにある。

今次遷宮は平成17年の開始以来、当初から国民の関心は非常に高いものがある。これは「常に変化する社会の中で、常に変化しない普遍的な存在」として式年遷宮を重視する人が多くいるからだと思われる。

戦後の式年遷宮は国費の支出が一切なく、すべて神宮の自己資金、皇室からの御献進と国民の寄付によって執り行われている。今次遷宮は550億円の経費が見込まれ、そのうち220億円が募財である。



■写真7—玉纏御太刀

そのような中、遷宮費の多くを占める用材の確保に関して自給の途が開かれつつある。遷宮ごとに約1万本必要となる用材確保のため、大正後期から所有する山林5,300haに檜の苗木の植林を実施し、今次遷宮ではじめてその間伐の一部が使用される。神宮の造林計画は200年を目標としている。つまり、今年植林した木は200年後の式年遷宮の用材となるよう計画的に生育されるのである。

このように式年遷宮とは100年、200年という人の一生を優に超えるスパンで進行しているシステムなのである。100年単位で神宮は静かに息づき、確実に鼓動を刻み続けて「最も古くて最も新しい」状態を保ち続けているのである。その営みは、まるで古代から現代へ貫通する一本の鋼のような精神なのかも知れない。その精神が「伝承されて来た過去」を「伝承している現在」を通過させることで「伝承される未来」に変化させるのだ。勿論、人間や世間にもそれなりの加齢と経験が必要とされるが、いつの時代でも「伝承している現在」が続いているのである。

伝承とはある姿やスタイルを伝えることを通して、心やメッセージを伝えていくことなのかも知れない。最古の建築様式の最新の神殿を仰ぐ時、そのメッセージは自然と解けるのだろう。その心と技に人びとは感動し、勇気づけられ、過去から未来に伸びる時間軸の中で、現在自分が置かれている位置を正確に測ることができるに違いない。

日本人が日本人であるから続けられる営みはそれほど種類があるわけではない。その営みを永遠に伝承することは、単なる建造物の定期的な建て替えではなく、日本人の精神の伝承の証として式年遷宮は続けられてゆく。

薬師寺の故高田高胤師は「永遠に向かって永遠に努力する人を菩薩という」と説かれたそうだ。そのことばを借りると「日本が永遠に向かって永遠に努力するのが式年遷宮なのだ」となるだろうか。永遠とは常に努力というエネルギーを伴うものなのである。